カリタス女子中学校　第三回入学試験

二〇二四年二月二日　実施

国語問題

（五〇分）

＊答えはすべて解答用紙に記入すること。
＊字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

一

次の①～③の――部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の――部のひらがなを漢字に改めなさい。④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

① 班長を決める。　② 土を肥やす。　③ 寸法を計る。

④ さいなんが続く。　⑤ 主役をこうばんした。　⑥ ただちに出かける。　⑦ めんかを栽培する。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※のついている語は、文章のあとに語注があります。

私たちを取り巻く環境は、好むと好まざるとに関係なく、ファッション雑誌やテレビ番組などの各種メディアから、間断なく、洪水のように押し寄せるファッション情報で満ちあふれています。中でも、現代の美のシンボルとしてのスーパーモデルたちの存在は、若さのもつ美しさと、その肢体が稼ぎ出す庶民離れした高収入で、若い人たちの憧れと関心をさらっています。

若く、しなやかに長く伸びた手足、余分な脂肪分など探しても見つからないほど痩せている身体、そして小さな頭部。それが、現代美のシンボルとして生み出されたスーパーモデルの特性です。日本最初の国際的モデルは伊東絹子でしたが、一九五〇年代にコンテストに出場した時の彼女は、当時の日本人としては珍しく頭と身長の比率が八頭身。その頃に比べると、現在のモデルたちの体形は劇的に変化し、身体全体が細く長く伸びて九頭身に近づかんという比率です。

現代の若い人の体格は、食、住、スポーツ、文化などの環境の変化により、この五十年間に伊東絹子なみになってきているとはいえ、スーパーモデルのような細くて長いプロポーションを持つ人が、どれほどいるでしょうか。若い世代は、A そんな現実を無視するかのように厚底のミュールや針金のようなピン・ヒールを履き、細長い身体のイメージを強調するファッションに身を包むことになりました。

靴がいかに歩きにくかろうと、頭に響く足音をたてようと、細長いイメージに近づくことが最も大切なことで、そのスタイルさえ維持できれば、転倒や捻挫の大きな危険性もかえりみず、走ったり、さらには車を運転したりする危険さえ犯しかねません。骨と皮だけのように痩せるためには、トリやウサギの餌にも充たないカロリーしか摂らない若者が多く見られます。現在、そのために、精神的な病の一種とみなされる〝栄養摂取不全〟という深刻な症状になる人の数が増え始めており、社会問題の一つになっています。

その背景には、自分の身体は自分の所有するものだから、ダイエットをしても、傷をつけても、自分の思う通りにしてよい――という意識が、若い人の生き方の底に流れ始めているように思われます。

自分の身体の実態を無視して描いた、理想のイメージを求めるという行為――それは、身体の客体化であり、精神と身体を切り離すことにほかなりません。変身願望のピグマリオン※のように、自分を理想通りの身体に、自由に作り変えられるものと思い込んでしまっているのです。そして、自分の身体がそのイメージ通りになった時のことを想像して、その念願達成の満足感と客体化された自分の肉体の美観に酔いしれて、少々の我慢と思い込んで、食べることさえ拒否してしまうのです。二〇〇七年、アメリカでは拒食症が八〇〇万人を数

えていると伝えられています。

〈　中　略　〉

「身体と衣服の危険な関係」について、別の視点から考えてみましょう。

「過剰にやせる」ということ自体、大問題ですが、昨今の若者に※顕著な痩身願望には、その先に「身体の客体化」さらには「B他人化」というもっと重大な問題がひそんでいます。実はそれこそが問題の本質なのです。自分の身体をより健康にするために筋肉のトレーニングをした結果として「痩せる」というのならまだいいのですが、少しでもモデルにくらべて太っているように見えると感じたら自分の身体を捨てて他人になろうとしているのです。こうなると、個人の生き方の問題を超えて、人類の生き方にかかわる文明論的なテーマになってきます。※最近話題になっている「エビちゃん現象」に、私はそれを感じてなりません。

先日、書店に行き、ファッション雑誌コーナーの前で驚きました。※「CanCam」だけが山のように積まれているではありませんか。ほかにも、女の子向けの雑誌はいろいろあるのに、積んであるのは「CanCam」だけ。店員に尋ねると、「『CanCam』しか売れません」という答え。

その理由は「CanCam」のモデル、「エビちゃん」こと蛯原友里が、若い女の子から絶大な支持を得ていることにあります。「CanCam」の特集のほとんどにエビちゃんがタッチしていて、一つのブランドまでできています。毎月毎月、エビちゃんの新しい服が出てきて、読者はそれをそのまま買ってしまう。その雑誌はほとんど販売するためのカタログと同じ役割を果たしています。

エビちゃんが「いい」といったら、無条件かつ無前提で「いい」。自分に似合おうが、似合うまいが、関係なし。エビちゃんのように、「可愛い」と言われて雑誌に出て、ゆくゆくはセレブになることを夢みる。そういうイリュージョン、幻想的な影響力がその雑誌にはあるのです。

そして、なによりも問題なのは、女の子たちは、エビちゃんにしろ、※押切もえにしろ、※山田優にしろ、〝誰〟かのなかに自分を入れてしまう。そこには、自分の身体という意識がまったくありません。その結果、カリスマモデルと同じ体型でなければ同じ服は着られませんから、過剰なダイエットをしてまでも、自分を「誰か」に近づける努力を怠りません。自分の身体を忘れて「他人化」するために生命の危険すらかけて努力する。今の若い人のファッションのモチベーションはこれにつきるといっても過言ではありません。

こうした仕掛けのなかに、ファッション・ビジネスとしてのチャンスはあるかもしれません。[1] 私は、このことに大きな危惧を覚えざるをえません。というのも、そもそもファッションというものは、自分をみつめるための一つのツールなのです。[2] ファッションの命は着る人の自己表現として、その[C]個性化と多様化にあります。ファッションとは自分を他人化して埋め込むことではありません。「いったい誰になりたいの？　あなたはエビちゃんになりたいの？」と、私はエビちゃんファンの女の子たちに問いかけたい。「こういう人間になりたい」というものがなければ、誰かになるしかない。そして、その「誰か」になるための装いを選び、身体を選んでいく。若者たちのファッションは、こうしたおそろしい仕組みのなかで動いているのです。そのことを認識しないかぎり、今の状況は繰り返されていくばかりです。

同じような身体感覚の欠如は「作り手側」にも見られます。私は※複数のファッションコンテストの審査員をして二十年以上になりますが、毎年七、八千人もの応募者があり、そこから二、三十人の「未来のクリエーター」を選んで、実際に彼らに服を仕立てさせ審査しています。たしかにみな斬新で、クリエイティブな可能性を秘めています。しかし、年々顕著になって不安に駆られるのは、[D]着て歩けるものが少ないことです。コミュニケーションツールであるべき「ファッション」なのに、ペーパースケッチのデザイン性ばかりが強調されている。デザインと身体との間に、大きな距離感を生んでいるのです。

こうした服を、スタイル抜群のカリスマモデルたちが着こなせば、どういうことになるか。ますます「身体の他人化」が進むばかりです。作り手側も商売としてこれに加担をしているのです。

[3]、こうしたファッションイメージに合わせて身体を「他人化」してしまう[E]危機的状況を生んでしまった原因はどこにあるのでしょうか？　ひとつは、ファッション業界のありかたに問題があります。その中心に長くかかわってきた人間として反省をこめてそう思います。

日本のファッション業界が確立し始めたのは、一九六〇年代後半から七〇年代にかけてです。そこで、※団塊の世代を中心に広がった顧客をメインターゲットとして※既製服化を促進させてきました。そこで出来上がったのが、マルチメディアを駆使して流行情報を創り、その傾向を採り入れた製品を主流のスタイルとして流通させる、いわゆる〝流行トレンド志向型マーケティング〟です。

さらに八〇年代から九〇年代には、グローバル化戦略とともに、デザイナーやブランドという〝作り手側から発想された商品〟が〝着る人〟に世界中から直接的に届けられる流通システムが完成します。これらの流通チャネルと仕組みは、若い人をメインターゲットとし

て築き上げられていきます。このシステムの最大の「欠陥」は、当然のことですが、若者も年をとるということにあります。

そこでファッション業界は、メインターゲットにした若者が年をとると、その下の若者へと乗り移ることで成長をとげてきました。六〇年代のファッション消費の主役は、第二次世界大戦後に生まれた団塊の世代。七〇年代は、産業社会の進展にともなって、増加した働く若い女性たち。彼女たちは、女性特有の身体の曲線美を意識する〝ボディコンシャス〟な感覚を持った〝パワースーツ〟と呼ばれる〝キャリアウーマンルック〟を生みました。九〇年代に入ると、その役割は次世代である団塊ジュニア層に引き継がれて、現在にいたっています。その果てに現出しているのが先ほど述べた「エビちゃん現象」や※１０９の※リアルクローズ人気です。

でも多少の問題はあっても当事者である若者が喜んでいるのだから、いいではないかという考え方もあるかもしれません。しかし、実はこれは当の若者にとっても不幸なことなのです。若者もすぐに年をとります。ファッションの中心の低年齢化がすすんでいます。ファッション・ショーの新人モデルたちは十四歳くらいが多くなりつつあります。かつては二〇代は充分に若者でしたが、いまや二十三歳が境とまでいわれています。若者も十年足らずで「ファッションの対象外」にされてしまうのです。それがいやなら自らの身体を「他人化」するしかない。「若者中心主義」は正確にいうと「あるべき若者中心主義」でしかありません。つまり若者にとっても「若者中心主義」は、「他人化」という強迫観念を強いられるしかけの中で行なわれ、きわめて辛くて危険なしくみを持ったものなのです。

これにはその推進役を買ってでているマスコミにも責任があります。「エビちゃん」現象だけではありません。カリスマモデルがファッションショーに出ると、そのファッションが一挙に売れてしまいます。二〇〇七年三月三日に行なわれた※「東京ガールズコレクション」には、四万人もの女の子が舞台を見つめ、いいと思った服は携帯ですぐに買える仕組みになっていました。そのコーディネーターは流行誌をはじめとする各種のファッションメディアが一体となったものなのです。

そこには、流通分野のさまざまな人が※介在し、演出が練られ、メディアとビジネスとハイテクが結びついています。そのモノを売るための仕掛けのなかに、若い女の子たちが取り込まれてしまっているのです。みんなが「エビちゃんファッション」になるのも不思議ではありません。その結果、ファッションは画一化してしまうのです。

「東京ガールズコレクション」や「ストリートコレクション」は、日本が世界に誇れるものだという見方も、ファッション業界やジャーナリズムの一部にあるようですが、私にはほんとうの意味でのクリエイティブな力がF＿＿そこにあるとは思えません。事実、海外のファッションジャーナリストは、今の日本の若者ファッションに興味を持って来日しても、二度は来てくれないようです。※喧伝されるほど若者

中心の日本のファッションが、〝衣服〟としての意味で本質的に独創的でクリエイティブなのでしょうか。ショーやパーティばかりが盛り上がってはいますが。

〈今井啓子『ファッションのチカラ』（ちくまプリマー新書）より〉

〔語注〕

※ピグマリオン……ギリシャ神話に登場する彫刻家。自分が作った理想の女性の像に恋をし、妻にしたいと願い続けた結果、像が命を吹き込まれて人間の女性になった。

※顕著……はっきり目立つようす。

※最近……この文章が書かれた、二〇〇七年ごろ。

※CanCam……二十代女性向けのファッション雑誌。

※押切もえ　山田優……蛯原友里と同時期に活躍したモデル。

※複数……二つ以上の数。

※団塊の世代……第二次世界大戦直後から数年間の第一次ベビーブーム時に生まれた世代。

※既製服……すでに商品としてできあがって売られている服。既製服が登場する前は、買い手の身体に合わせて作る「注文服」がふつうだった。

※１０９……渋谷にあるファッションビル。十代から二十代の女性をメインターゲットにしている。

※リアルクローズ……現実性のある服。一般庶民でも買える価格帯にあるファッション性の高い既製服。

※東京ガールズコレクション……日本最大級のファッションイベント。十代後半から二十代の一般女性を対象とした服飾製品の販売会とファッションショー、ライブを主なコンテンツとしている。

※介在……間にはさまって存在すること。

※喧伝……盛んに言いふらして世間に知らせること。

問一　1 ～ 3 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア　あるいは　　イ　それでは　　ウ　だから　　エ　でも

問二　A そんな現実 とありますが、これはどのようなことを指していますか。「……こと。」の形で答えなさい。

問三　B 他人化 とありますが、これはどういうことですか。「……こと。」に続く形で答えとなる部分を、本文中から十二字でぬき出して書きなさい。

問四　C 個性化と多様化 とありますが、これと反対の意味の三字の語が本文中にあります。これをぬき出して書きなさい。

問五　D 着て歩けるものが少ない とありますが、これはどのようなことを表していますか。答えとしてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　一般の人が着て生活することを考えずに、デザインとしての美しさをねらったものが多い。
イ　可能性は感じられてもデザインの完成度が低く、積極的には勧められないものが多い。
ウ　若者の体型や感性にばかり合わせていて、幅広い年齢層を対象にしていないものが多い。
エ　日常生活で気軽には着られそうにない、高価な素材ばかりが使われているものが多い。
オ　斬新さを追求するあまり目立ちすぎてしまい、一般の人が着るのははずかしいものが多い。

問六　E 危機的状況を生んでしまった原因はどこにあるのでしょうか？ とありますが、この問いに対する答えを、筆者は二つ挙げています。その二つを、本文中からそれぞれぬき出して書きなさい。

問七　F そこ は何を指していますか。答えとなる部分を本文中からぬき出して書きなさい。

問八　筆者は、若者のファッションとはどういうものであってほしいと思っているのでしょうか。本文から読み取って答えなさい。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※のついている語は、文章のあとに語注があります。

新高校一年生の「矢口楓」は、高校入学目前、ふと足を踏み入れた神社の片隅の弓道場で、大人に交じって弓を引く高校三年生の「真田乙矢」の凛々しい姿に魅せられ、弓道会に入門した。夏休みに入ったとある日、楓が神社に立ち寄ると、弓歴が半世紀以上にも関わらずなぜか初段止まりの老人「国枝」が、弓を引いている姿を目にした。楓は国枝の弓の美しさに惹かれ、教えを請うことになった。一方で乙矢は※参段への段級審査に臨む。自信をみなぎらせて臨んだ乙矢であったが、不合格となってしまった。その後、乙矢は練習を欠席し、楓も弓への熱意のあがらないまま練習に参加していた。

その翌日、楓は朝のジョギングの途中で神社に寄ることにした。

お盆休みだけど、国枝さんは来ているはず。あの人は里帰りする年じゃない、むしろ来てもらう方だ。だから今日も練習しているにちがいない、といささか失礼な予想を立てたのだ。

道場に着いてペースを落とし、クールダウンしながら境内を歩いていると、奥の方からスパンと A小気味よい音が聞こえてきた。

やっぱり、国枝さん、来ているんだ。

楓は奥の弓道場まで小走りで行った。※射場には、国枝がひとりだけで立っていた。国枝はちょうど弓を引き終わったところのようで、矢を取りに行くために※跪坐をして※カケを外そうとしていた。そんな時でもぴんと背筋が伸びている。

ああ、こういう何気ない姿勢も決まってるな。長くやっている人は B そうなのかしら。

楓が足を止めて見惚れていると、国枝が気がついてにっこり笑った。

「おはよう。また来たんだね」

「はい。いまはお盆休みで、ご指導もお休みなんです」

「では、また一緒にやりますか？」

「ご迷惑でなければ、ご一緒させてください」

思わず敬語になった。くだけた言い方では失礼になる、そう思わせるようなたたずまいが国枝にはあった。

「迷惑なんてとんでもない。また一緒に引けるのは嬉しいです。今日は弓道着は持って来ていますか？」
「はい。リュックに入れてきました」
「じゃあ、弓に※弦を張ったら、着替えてください」
「先に弦を張るんですか？」
「そうですよ。弓はしばらく置いた方が落ち着きますから」
「わかりました」
言われた通りに弦を張り、更衣室で※胴着に着替えていると、射場から声が聞こえてきた。国枝が誰かと話をしているようだ。
嫌だな。またあの厳しそうな※笠原さんが来てるのかな。
着替えを終えると、楓は［　C　］射場の方に出ていく。
「それで、あなたは私に何をしてほしいのですか？」
国枝の声がはっきり聞こえてきた。
「僕の射を見てほしいんです」
相手の声には聞き覚えがある。乙矢だ。声の調子が切迫している。楓はまずいところに居合わせてしまった、と思った。更衣室に戻って隠れていようか、と迷ったが、それより先に乙矢の視線が楓をとらえた。乙矢の目が驚きで見開かれた。
「なんで、きみがここに？」
乙矢の声は裏返っている。楓が答えあぐねていると、国枝が代わって返事をした。
「ジョギングでここを通りかかったので、私がいっしょにやろうと誘ったんだよ。この子は無段だけど、うちの弓道会に所属しているっていうから」
「そうだったんですね」
D
納得したような、していないような返事だった。それどころではない、という切羽詰まった雰囲気を乙矢はまとっていた。
「では、僕の方も見てもらえますか？」
「いいですよ。あなたも着替えていらっしゃい」

それで、乙矢は自分の使っている弓を取り出して弦を張ると、更衣室へと向かった。
国枝は乙矢のことなど気にしていない様子で、楓に話し掛ける。
「じゃあ、※巻藁をやってみましょうか？」
「はい」
そして、巻藁の前で国枝の指導を受けていると、着替えを終わった乙矢が出て来た。
「せっかく三人いるんだから、審査の動きでやりましょう」
乙矢は少し驚いたようだったが、「はい」とうなずいた。
「立ち位置はどうしましょう？」
乙矢が尋ねる。
「あなたに※大前をやってもらって、私が落ちでいいですか？」
「はい」
乙矢が同意した。楓は真ん中に立つ。大前のタイミングに合わせればいいので、真ん中は気楽だ。日頃の練習でも、いちばん経験の浅い人間が真ん中に、いちばん格上の人間が落ち、つまりいちばん後ろを務めることが多い。
そして、射場の隅に三人で立つ。乙矢の背中が目の前にある。背筋がぴんと伸びて、きれいな立ち姿だ。お辞儀をして入場をする。乙矢は楓より背が高いので、その分歩幅も広い。楓はいつもより少し速いテンポで歩く。楓はまだ袴の扱いに慣れていないので、座ったり立ったりするタイミングが少し遅れ気味だ。そして、跪坐の姿勢を取ると、後ろから立っている乙矢を見る。乙矢の身体には力がみなぎっている。その目は楓の位置からは見えないが、きっと視線は怖いほど鋭く、的をにらんでいるのだろう。いつもそうであるように。
乙矢の射は力強く、一直線で的に中った。続く楓の射は三時の方向に矢が逸れた。国枝は力みなく真ん中に中てる。二射目も同様に、乙矢と国枝は的に中て、楓だけ大きく外した。
退場して矢取りをして戻って来ると、乙矢が待ち構えたように国枝に尋ねた。
「どうでしたか？」
はやる乙矢を、まあまあ、というように国枝は制した。

「私より先に、このお嬢さんに感想を聞いてみましょう。この前、ふたりでやった時と比べて、どうでしたか？」
「あの時はふたりだったし、立ち順も違うので、単純な比較は難しいんですけど」
いきなり話を振られて、楓は少し口ごもった。何と言えば、乙矢のことをうまく表現できるだろう。
「今回は、二番目だったので、大前に合わせなきゃ、ということを考えて、ちょっと焦りました。歩幅が違うので、早く歩かなきゃいけないし。前は自分が大前だったので、自分のペースでできたんですが」
E 乙矢の顔がさっと曇った。何か自分はまずいことを言っただろうか、と楓は思う。
「乙矢くんの射についてはどう思いましたか？」
「カッコよかったです。的を絶対外さない、という気迫を感じました」
F 楓は乙矢をフォローしたつもりだったが、乙矢の顔はさらに歪んだ。逆効果だったようだ。
「わかりましたね。このお嬢さんが、あなたの射の欠点をみごとに見抜いている」
「はい」
乙矢が力なくうなだれる。楓には、訳がわからない。
「あなたは何をそんなに焦っているのですか？　それが射に表れている」
「焦っている……？」
「審査当日の射を見てないので、これはあくまで私の考えですが」
国枝は優しい目で乙矢を見ながら、一語一語言葉を選ぶようにゆっくり語った。
「あなたの射型はきれいだし、的中もする。参段なら合格にしてもよかったかもしれない。だけど、若い方には正しい射を身に付けてほしい、という思いが我々先人にはあるんです。だから、あえて厳しくみる、そういうことだったのかもしれません」
国枝の言葉を噛みしめるように、乙矢は視線を下に向けている。
「問われているのは技術ではなく、弓に向かう姿勢ではないでしょうか」
「弓に向かう姿勢……」
乙矢は深い溜め息を吐いた。

「ありがとうございます。もっと精進いたします」
精進なんて古い言葉、よく使えるなあ、と楓は感心して聞いている。
乙矢は弓と矢をしまい、「ありがとうございます」と弓道着のままで出て行った。その顔は暗く、もやもやしたものを胸に抱えているようだった。乙矢の姿が見えなくなると、楓は国枝に聞いた。
「私、何か乙矢くんについて、まずいことを言ったのでしょうか？　乙矢くんの射、とてもいいと思っているんですけど」
それを聞いて、国枝は微笑んだ。
「いえ、正直に話してくれて、乙矢くんも感謝してると思いますよ」
「だけど……」
自分の言葉を聞いて、乙矢はショックを受けたようだ。乙矢を貶めるようなことを口にしてしまったのではないだろうか、と楓は気にしている。
楓の想いを察したのか、国枝は優しい目をしたまま説明した。
「そろって弓を引く場合には大前のタイミングにみんなが合わせるものですが、一方で大前こそ続く人たちのことを把握しておかなければならない。双方がお互いのことを意識しあって、初めて三人が一体となるんです。あなたが焦った、ということは、大前があなたの歩く速度を考慮していなかった、あなたのことが見えてなかった、ということなんです」
確かに、国枝とやった時のような安心感、一緒に弓を引いている、という充実した気持ちはなかった。乙矢に遅れまい、とするだけで精一杯だった。
「それに、射をする時には『中ててやろう』という意識を剥き出しにしてはいけません。そういう姿勢は醜いとされているんです」
「なぜですか？　弓を引く時は誰だって中てよう、と思うんじゃないですか？」
楓の言葉に、国枝は再び微笑んだ。
「教本通りの答えで言うなら、的に囚われているのは美しくない、ということになります」
「教本ですか」
弓道会に入会した時、『弓道教本』があることを教えられた。全日本弓道連盟が作った、弓道の教科書のようなものだ。第一巻の射法篇

というものを購入するようにと言われ、母に頼んでネットで購入してもらった。だけど、写真が古めかしく、言葉も難しいので、楓はぱらぱらめくるだけで、ちゃんと読んではいない。

「教本通りじゃないとダメなんですね」

「ええ。ですが、ただ教本に書かれているのを鵜呑みにして、それを形だけ真似するというのも、よくないことだと私は思います。教本は道しるべではありますが、なぜそうなるのか、自分の射がどういうものかは、毎日修練して自分でみつけねばならない。※畢竟それが弓を引くことの意味だと私は思っています」

「よく……わかりません」

だとしたら、別に乙矢が悪いわけではない、ということにならないだろうか。

「わからなくてもいいのです。いまわからなくても、いつかわかる時が来るかもしれない」

「ずっとわからないこともあるんですか？」

楓が聞くと、逆に国枝が問い返す。

「それは嫌ですか？」

「ええ」

楓がきっぱりと返事すると、国枝は破顔一笑した。

「わからないことの答えを探し続けることも、大事なことですよ。何もかも、簡単に答えがわかったら、つまらないじゃないですか」

そうかなあ。口には出さないが、楓は心の中で思っている。わからないことがすぐに解決する方がすっきりするのに。

「ともかく、G乙矢くんの問題は乙矢くん自身で解決しなければなりません。私たちができることは、ただ見守ることくらいです」

見守ること。確かに、それくらいしか自分にできることはない。それほど親しくもないし、乙矢より弓道が下手な自分は、相談相手にもならないだろう。

「さあ、もう少し引きましょう。今度は立射で」

そう国枝に促されて、楓は矢を持ち直し、射場の定位置へと歩いて行った。

〈碧野圭『凛として弓を引く』（講談社文庫）より〉

〔語注〕

※参段への段級審査……「参段」とは「三段」のこと。弓道では、級位・段位（級位は五級から一級まで、段位は初段から十段まで）があり、自分の実力が向上すると、それに見合った級位や段位を受けることができる。参段の合格率は一〇～二〇％。

※射場……弓を射る場所。

※跪坐……ひざまずいてすわること。

※カケ……弦から右手親指を保護するためにはめる鹿革製の手袋のこと。

※弦……弓の両端に張る糸。

※胴着……ここでは弓道着のこと。

※笠原さん……以前、国枝の指導を受ける楓を歓迎せず、探るような目つきで眺めていた女性。

※巻藁……弓道における型の稽古用の的。

※大前……数人で弓を射るとき、最初に射る射手。

※畢竟……「結局」の意。

問一　A 小気味よい　の意味としてもっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ふんわりとやわらかい　　**イ**　まったく恐ろしくない　　**ウ**　すっとするように快い

エ　おどろくほど大きい　　**オ**　見えないほど素早い

問二　B そうなのかしら。とありますが、「そう」とはどのようなことを指していますか。説明しなさい。

問三　C にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　だましだまし　　イ　うきうきと　　ウ　ばたばたと　　エ　なくなく　　オ　おそるおそる

問四　D 納得したような、していないような返事だった。とありますが、「乙矢」はなぜそのような返事をしたと考えられますか。もっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　国枝に自分の射を見てほしいと発言したことを、楓に聞かれたかもしれないことに焦り、そのことをごまかすためにもさっさと次の話に移ろうとしたから。

イ　参段への段級審査で不合格となり、その後弓道会を欠席して自主練習を積んできたものの、自身の射に対してまだまだ納得できる状態ではなかったから。

ウ　ジョギングでたまたまここを通りかかった、という国枝の発言は納得できるものではなかったが、楓が弓道会に所属している点は事実で、そこは納得したから。

エ　楓がここにいることにとまどい、国枝の説明を聞いても腑に落ちなかったが、自身の問題も早く解決したかったため、強引に納得しようとしたから。

オ　弓歴の長い国枝が初心者の楓を射場に誘うわけがないと思うものの、弓道会はお盆休みなので楓が指導を受けるにはここしかないことを思い出したから。

問五　E 乙矢の顔がさっと曇った。　F 乙矢の顔はさらに歪んだ。とありますが、「乙矢」の顔が曇り、その後歪んだのはなぜですか。その理由を、具体的に説明しなさい。

問六

G 乙矢くんの問題は乙矢くん自身で解決しなければなりません。とありますが、「乙矢くんの問題」を解決するためにはどのようにしたらよいと「国枝」は考えていますか。「乙矢くんの問題」とはどのようなことかを明らかにした上で、説明しなさい。

問七

本文全体を通じて、「国枝」はどのような人物であると描かれていますか。答えとしてもっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 楓が乙矢を心配していることを微笑ましく思いながらも、乙矢の悩みは自分こそが解決してあげたいと願う、お節介な人物。

イ 相手の状況を把握し、時に丁寧な対話で、時に実践を通じて気づかせることを重視しながら乙矢や楓を導く、穏やかな人物。

ウ 乙矢の苦しい気持ちを読み取り、乙矢の課題を解決するために、不足している弓の技術を一つ一つ伝えていく、優しい人物。

エ 乙矢に対しては厳しく接し、楓に対しては優しく接しているように、人やその時の状況によって態度を変える、きまぐれな人物。

オ 楓の現在の射の力量をふまえ、乙矢の相談相手としてふさわしい存在になるよう、弓道のことを一から楓に指導する、熱心な人物。

国語の問題はこれで終わりです。